図書館だより

1・2月号

令和6年1月17日
港区立青山中学校
校 長　中田 和直
学校司書　三島 裕美
図書館支援員　武田 優子
塩野谷 恭輔

2024 年がはじまりました。新年の目標を立てて、新たな一年のスタートを切りましょう。

今月号では高校入試に役立つ本などを紹介しています。何を読もうか迷ったらぜひ参考にしてください。

冬休み特別貸し出しの返却日は１月 16 日(火)です。未返却の人は速やかに返却してください。

高校入試全力応援！！

都立高校入試　過去６年分出題作品をまとめました！
勉強の合間に、気になる本を読んでみましょう。

年度	出題作品　※　○が付いているのは青山中にある本です
2023 年度	清水晴木『旅立ちの日に』中央公論新社
2023 年度後期	河邉徹『蛍と月の真ん中で』ポプラ社
2022 年度	○　村山由香『雪のなまえ』徳間書店
2022 年度後期	○　青山美智子『赤と青とエスキース』PHP 研究所
2021 年度	○　伊吹有喜『雲を紡ぐ』文芸春秋
2021 年度後期	天沢夏月『17 歳のラリー』KADOKAWA
2020 年度	瀬那和章『わたしたち、何者にもなれなかった』KADOKAWA
2020 年度後期	○　片川優子『動物学科空手道部１年高田トモ！』双葉社
2019 年度	三浦哲郎『燈火』幻戯書房
2019 年度後期	馳星周『雨降る森の犬 』集英社
2018 年度	加藤ジャンプ他『小辞譚～辞書をめぐる 10 の掌編小説～』猿江商會より 澤西祐典「辞書に描かれたもの」
2018 年度後期	加藤千恵『ラジオラジオラジオ！ 』河出書房新社

名作まちがいさがし

『夜叉ヶ池』
泉鏡花

夜叉ヶ池の竜神・白雪姫は、遠く離れた千蛇ヶ池の若旦那に恋をし、会いに行きたくて、自分を池に封じる鐘を壊してしまおうと考えます。しかし、鐘楼守の夫を慕う百合の健気な姿に心打たれて、思いとどまるのでした。

下の２枚の絵の違いを５か所見つけてください。

作品の概要・解説

大正時代、越前国（現在の福井県北部）の山深い村を旅の学者、学円が訪れました。学円は村外れの鐘楼で、美しい娘の百合と出会います。彼女の夫は晃といい、学円が探していた行方不明の親友でした。晃は山奥の夜叉ヶ池を見ようと村を訪れたときに、瀕死の鐘楼守に会って、鐘をつく役目を受け継いだといいます。池には竜神が封じられていて、一日三度鐘をつかなければ、洪水が起きるというのです。

竜神は、自由を封じられて鬱屈していました。そんな時、日照り続きで困った村人たちが、百合を生け贄にしようとして――。

『夜叉ヶ池』は、白雪姫という竜神の姫や彼女に仕える池の生き物の妖怪などが登場する、和風ファンタジーのような戯曲です。夜叉ヶ池は実在していて、そこに伝わる伝説を題材にしています。

作者の泉鏡花（一八七三～一九三九）は、明治後期から昭和初期にかけて活躍した小説家。小説『高野聖』や戯曲『天守物語』など、人間とは違う異界のものが登場する、神秘的で繊細な表現の物語を多く書いています。

※『夜叉ヶ池』は岩波書店、立東舎などから発行されています。

青山中学校図書館では今…

青山中学校版2023年10大ニュース投票を実施しています。2023年を振り返り、あなたの心に残っているニュースの番号を10個ワークシートに記入してください。投票結果を集計し、**結果と同じニュースをピタリ10個選んだ方には「ピタリ賞」、近かった方には「準ピタリ賞」を授与します。**

1月 24 日(木)が締め切りです。投票用ワークシートは青山中学校図書館、階段踊り場(2階と3階のあいだ)、返却ボックスに用意していますので、ぜひ投票してくださいね！提出場所は青山中学校3階図書館カウンター、2階返却ボックス内です。**参加は簡単！時事問題の復習にもなる！**皆さん、ぜひやってみてくださいね！

開館時間　＊日によって変更になる場合があります。

火・水・金 AM 11：15～PM 4：45　／　月・木　AM 10：15～PM 4：45

★図書館まつり2023の企画**「本を借りてギネス世界記録に挑戦しよう！」**は楽しんでいただけましたでしょうか？第一回青山中学校紙コップタワーの最高記録は、「10段」でした！

1位　3－2　W･R さん

1－1　I･Rさん

（1 位のお二人には賞品がありますので、図書館に来てください。）

★3 学期に来館したひとに「学業成就」「金運御守」「健康御守」「開運招福」の御守りしおりを差し上げます。今年も青山中学校図書館をどうぞよろしくお願いします。

おすすめの本「リ・スタート」

『月と6ペンス』

サマセット･モーム/著　金原端人/訳（新潮文庫）

「描くこと」に憑りつかれた男が、四十歳を過ぎて、安定した生活も家庭もすべてを投げ捨て、表現の神髄にたどり着くまでを、評伝のかたちで書いた小説です。今から百年以上前に書かれた本なので、社会や女性の描き方に古さが感じられる箇所はありますが、ロンドン･パリ･タヒチを舞台とした情景や複雑な人間模様の描写は、現代でも多くの人に深い印象を残すものになっているはずです。

『杉森くんを殺すには』

長谷川まりる/著　（くもん出版）

「杉森くんを殺すことにしたの」とヒロは兄のミトさんに打ち明ける。「今のうちにやりのこしたことをやっておくこと、裁判所で理由を話すために、どうして杉森くんを殺すことにしたのか、きちんと言葉にしておくこと」という 2 つの助言をもらい、ヒロはそれらを日々実践していく。全然完璧じゃないけど頼れる友人や家族に支えられて、変化･再生するヒロの気持ちに、きっと皆さんは共感できるでしょう。

『ぼくたちのスープ運動』

ベン･デイヴィス/著　渋谷　弘子/訳（評論社）

病気で入院している時、主人公はある女の子と善い行いをする約束をします。少年は退院しても約束を守り、スープをホームレスの人たちに配り始めます。この行動がやがて大きな注目を集めるようになってゆくと共に、運動に関わった人たちに人生の再出発をもたらします。小さな思いやりは世界を変える！のか？

※お詫びと訂正です。11・12 月号で紹介した『アップステージ』の出版社を(くもん出版)と表記していましたが、正しくは(評論社)になります。